

沖

俳句雑誌[おき]

1月号

沖 発行所

新春メッセージ

四十三年目の「沖」——能村 研三



新しい年を迎えた。昨年、世間では震災の復興も思うように進まず、近隣諸国から国境が脅かされたり、自然の脅威により各地で思わぬ被害があったり不安を感じる年であった。しかし昨年の暮に発表された「今年の漢字」では「金」が選ばれ何かほっとするものを感じた。ロンドンオリンピックでの日本勢の活躍、金環食などから選ばれたものだろうが、暗い年を最後に明るくしてもらったようにも思える。

「沖」にとっては、五月の「五百号記念号の発行」「五百号記念大会」と大きな節目であったが、上谷昌憲さんの「俳人協会の俳句大賞」、広渡敬雄さんの「角川俳句賞の受賞」、俳誌協会の「編集賞」を「沖」が受賞するなど良いニュースが多い年でもあった。

今年の私の年「六白金星」の運気は上々のようで「人生の目標に向かってチャレンジする良い年であり、長年の夢に向かう時。仕事も勉強も充実し、行動や言動に活気がみなぎってくる」とある。

本年は公務の仕事と俳句の仕事のバランスの比率をさらに俳句の方に傾けられそうなので、昨年にも増して東北、中部、九州などの地方ブロック大会に加えて、各支部への訪問指導句会の機会を増やしていきたいと思っている。編集部には多忙なことで、原稿の遅延などで迷惑をかけているが、辻美奈子編集長からは「忙しい事を喜んでいらっしやるようで……」と言われたが、忙しさを切り抜けていくスリルと気力の充実は感じているが、いい加減な仕事にならないよう丁寧で誠実であることを心がけていきたいと思っている。お預かりしている句集の序文にも早く着手しなければという思いも強く、自分の第七句集の刊行も実現したいと思っている。

本年は「沖」の外の仕事としては、俳人協会の講演として仙台、金沢、花と緑の吟行会、さらにはNHK学園の和倉大会の選者の仕事がすでに予定されている。

「沖」は本年創刊から四十三年目を迎え、「四十周年」と「四十五周年」のちょうど間の年となる。五月には先師登四郎の十三回忌となることから、私が主宰を継承して十三年目になるわけだ。新たに同人になる人は先師を全く知らない人も多くなりつつあるが、「沖」の創刊の理念である「伝統と新しさ」の精神を尊重し、さらに私が「沖」を引き継いでからの「ルネッサンス沖」を身をもって実行していきたいと思っている。

連山の威

能村 研三

「よぐばり」のすすめ

先日の中例会で栗原八子さんの句で、
着ぶくれていよ欲張り婆となる
という句があった。

栗原さんはまた「婆」と呼ぶに相応しくないが、歳を重ねていくと、どうも欲張りになるのかも知れない。

私も「在年後」年目になるが多くの「沖」の皆さんから、早く俳句一本に専らしてほしいという声を聞く。

昨年は仕事を持ちながらもある程度自由を効かせてもらい、地方支部の俳句の指導に行くこともできた。しかし、金銭的な欲は別にして、仕事への意欲はまだまだ旺盛で、私が思い描いた夢の実現に向けて熱のある思いは膨らむばかりである。

先日、文化事業の企画展のことである方を訪問し、その企画内容を熱く述べさせてもらったところ、相手の方から「能村さんは欲張りですね。」と言われた。それは、誉められたのか、もう少し自制するように言われたのか最初は判らなかつたが、今は「誉められた」と勝手に思い込んで企画を進めようとしている。

連山の威に促され冬構

朴の葉の飛力伸ばして落ちにけり

瓶の蓋頑固に開かぬ虎落笛

ビル谷を一気呵成に初木枯

従兄弟石本義美氏を悼む

遠時雨 献体といふころざし

小春日や耳元で聴く梳鋏

湯ざめして編集後記の頭文字

打たれずに出る釘を抜く冬旱

耶馬漢の江溯溪亭氏を訪ねて

旧知二代耶馬客殿の箱火鉢

動かずに顎で数へし寒の鯉

先ほどの栗原さんの句ではないが、年を取るにつれて自分の時間の限界を感じ始めると、この「よくばり」の気持が膨らんでくるようだ。人生のゴールが見えないと、すべての選択肢を試している時間もない。もちろん後戻りもできない。しかし、その時点で目の前にあるものの中から最良の選択をしていけば、最終的には夢が実現できるかもしれないと思ふのである。

俳句を作る人は、そのほとんどが「よくばりな人」なのかも知れない。同じ一生を過ごすにも、仕事や家庭の仕事と両立しながら、句作に励むのであるから、まさによい意味での「ワークライフバランス」がとれた人ということになる。

何もしなければ、楽で良いかも知れないが、一生は一度しかないのだから、ある意味で「あれもこれも」忙しく体を動かしてみるのも面白いかも知れない。

能村 研三

蒼茫集



枕 皺

安居正浩

団栗の領土広げるころげやう
枕皺たたきて均す神の留守
芒原明日になれば消えさうな
蓑虫の思ひ出づくり部屋づくり
雨音を聞きそれから衣被
名山の百の一山紅葉せり

紅を引く

北川英子

ふかふかの産着へリボン冬に入る
パイオニアの孤独や蒼き秋薔薇
手鏡の秋思へきりり紅を引く
呼吸器科循環器科と日の短
息ととのへて霜の夜の電話音
悲鳴めく風を恠へて冬三日月

樵の黙

大畑善昭

幕開けの一景に樵黄葉かな
黄落や斧の一打も入らぬ森
樵の黙朴の黙秋深みゆく
黄落の樵を叩けばおとおと声
豊々と白神山地秋澄めり
どこまでも秋どこからも津軽富士

聖日輪

遠藤真砂明

冬が来る甚平鮫の生簀にも
いのち惜し暁の霧笛の遠鳴りに
一滴が男の子の宇宙芋の露
癒えよと届く荒潮の金目鯛
横なぐり雨が雨呼ぶ冬鷗
翔先生亡き冬風の聖日輪

翁の忌 酒本八重

どつしりと据る歳時記翁の忌
丈草を思はばしぐれ俄かなる
もの干してももの叩かれて冬繋る
点眼や冬青空を滑らせて
馴染む箸なじまざる箸恵比須講
転ぶなの伝言冬天澄みにけり

雪来るか 森岡正作

嫁の来手なき魯田の豊かなり
茸狩るどの道行くも獣道
白神の風騒風狂雪来るか
全山の鈴鳴るやうに紅葉降る
群青の沼群青に水澄めり
故郷に似たる異郷の鴟日和

禽 千田百里

露の世に逆立ちをして砂時計
湯豆腐やちよつと面倒見過ぎかも

おでん屋に入るユニクロの大袋
禽のこちよ小春日の野に在れば
翔先生を泣かせし波郷忌の近し
高階より高階の背を見て寒し

樹の位 吉田政江

銀翼の音なき高さ大花野
誰か目を逸らすときまで穴惑
小鳥来る検索地図を拡大し

白神の黄葉に決まる樹の位

陸奥三句

紅葉且つ散る津軽峠は風の道
陸奥の雨の棒稲架けものめく

さうかもう 辻美奈子

残菊に正装の香のありにけり
無花果が出たよさうかも居ないのか
母の家の寒灯ひとつ残りをり
眠りては白鳥闇に声洩らす
猫も子も砂の匂へる寒波かな
草木は眠りぬ凧は猛り

序 章 千 田 敬

みちのくに一会を期してもみぢ季
父祖の地とおもへばことに照紅葉
行く秋や別れは「へばね」と津軽弁
じよんがらの転調急や身に入みて
立冬のこれが序章よビル疾風
砂町の夕日遠見に波郷の忌

灘 風 荒井千佐代

ロザリオの珠の空色小鳥来る
海光と潮の匂ひの中に稲架
秋のカレー屋天井にカヌー吊り
くんち終ふ灘風つるばかりなり
穴惑ひ迷ひ込みたるトラピスト
秋深むマリアとベルナデッタにも

午の雨 甲州千草

草の絮隣家さらりと消ゆるなり
上機嫌の柘榴の下に居る不安
裂けば水噴く白神の月夜茸
白神の黄葉ぼかしの午の雨
津軽三味佳境良夜の膝頭
ビルの灯の冷まじ射手座何を射る

黄 落 藤原照子

一瞬の風と交響 榎落葉
樹齡四百榎 黄落の直下かな
序破急の自在や白神榎落葉
津軽じよんがら胸にたたためり十三夜
黄落の榎林に透く岩木山
解脱とも大樹いつせい落葉かな

正 装 久染康子

冠雪の富士正装の威のありぬ
白鳥飛来羽の付け根に力瘤
落葉山あつけらかんと空のあり
凜になりそびれたる臆病風
脛よりも白き流木磯焚火
いまひとつ氣勢あがらぬ一の酉

枯れといふ 藤森すみれ

枯れといふほのかな温み落葉松に
星たちの闇にをさめし藁火かな
ゆるぎなきこの家稲架の立ちにけり
三番手とふ生き方の枯れを踏む
雨上ると鋼のやうな八ヶ岳に雪
から松の濡身かがよひ黄落す

声もたず 樋口英子

秋遍路深き祈りは声もたず
あらがはず流れず風の花芒
ようおいでなしたと熱つあつ茸汁
豊年や土蔵大きく開かれて
今年藁積みて安らぐ村となる
大花野ゆけば亡き母待つごとし

太古の高さ 望月晴美

黄葉大樹のぶなに太古の高さあり
林檎熟れはるかに威ある津軽富士
まだ何か焼く田仕舞のうす煙
草の絮未来ゆつくりあるがまま
紅芙蓉今日のころの色となし
あひついで伯父伯母送り星月夜

天平の朱 宮内とし子

この里を天平の朱に吊し柿
蛇行する川遠ざかる後の月
釣瓶落しゼブラゾーンの浮き上がる
黄落の森に五感を研ぎ澄ます
倒木に怪しき茸集まれり
冬近し巨木を抱けば森の声

圏外に 林昭太郎

よく弾む花野歸りのツアーバス
虫の音を小さく分けて分譲地
営みは屋根の数だけ鱈雲
澄み切つてダムにダムの水
乳牛の乳房ももいろ冬はじめ
夜の雨は雪に電話は圏外に

月光 大川ゆかり

萩の声念珠の房を整へる
喪歸りの籠るごとくに秋日傘
月を待つなら重口のワインなど
月光をたつぷり浴びて猫戻る
後ろ手のほどけて行きぬ花野中
七宝の深きくれなゐ初時雨

風の坩堝 細川洋子

眼光鋭き月光に見えたり
津軽かな身に入む三味の撥捌き
触診させ給ふ母撫すさまじき
白神は風の堵渦よ黄葉舞ふ
黎明に句を詠む習ひ霜しんしん
立冬の曲げる上腕二頭筋

潮鳴集

微粒子 齊藤 實

仕合せは膨らむものや蒲団干す
生き方に器用さはなし寒卵
霜月の日矢の微粒子しづまらず
着ぶくれて身は革新を貫けず
凍鶴の声に烈烈たる鬪志

切手 栗原 公子

色鳥や宛名おもひて選る切手
「いやいや」が知恵のはじまり新松子
青森 三句
どこからも見え秋麗の津軽富士
釣瓶落しお岩木山の影絵めく
たわわなるアップルロード秋日燦

銀の折鶴 東 良子

息入れし銀の折鶴十三夜
渡り鳥天空の道知り尽す
鳥兜助詞の一字が句を殺す
人間に一線画す大白鳥
ともどもに遙けく仰ぐ冬銀河

遠き日 佐野ときは

対岸の灯も鮮やかな十三夜
空澄むや農は下向くこと多し
しぐるるや花屋のバケツみな細く
縄跳びの輪に遠き日の空がある
草にまだ伸びる力や小六月



『冬の金魚』

(自選二十句)

頓所友枝

受験子を黎明の駅に送りやる
さくらんぼ恋してるらし子のみやげ
守るものふゆる齡の白日傘
おふくろといつしか呼ばれ青木の実
燈を消して音の生まるる春の雨
産土に父を還して粽解く
秋夕焼たやすくきのふ忘れけり
神の留守掬へば消ゆる海のいろ
そこまでのつもり素颜柿の花



一木の風になりきる野分かな
縁側に座布団ふたつ菊日和
東京の死角に冬の金魚かな
悲しみは祈りとなりて秋夕焼
癒ゆるてふ未来なき掌のあたたかし
花は葉にけふの命のありがたく
見えぬ子に空の青さを言うて秋
おふくろと呼ぶる日待つや聖五月
病む人にやさしさ貰ふ緑雨かな
鳥威しわたしの敵は私かも
白鳥来とうに切れたるパスポート

『あまねく』 (自選二十句)

林昭太郎

関東のあまねく晴れる寒卵
たくらみに似て炭の火の美しき
はつふゆの光積み上げ角砂糖
硝子にも影といふもの梅三分
にはとりの少し汚れて二月尽
ティーバッグ糸で操る春隣
ワイシャツのひやりと朝の桜かな
アイロンにまだある余熱夕桜
春風やまだ濡れてゐる水彩画



ハモニカに鉄の味する麦の秋
花は葉にドレッシングは三層に
レコードの終りは無音昭和の日
網が出て少年が出る木下闇
赤ん坊の尻ひんやりと雲の峰
透明な翅に影あり原爆忌
ひまはりは種に少女は母親に
夏が逝く漂白剤にシャツ沈め
月明にすこし拗ねたる三輪車
育児書の葉みづいろ小鳥来る
小鳥来る紅茶の中に日が射して

「馬込百坂」

(自選二十句)

石川笙児

杭といふ杭に鶉のゐる四温かな
花の雲馬込・田端に文士村
灯の入りてさくら重たくなりけり
青空のそのまま暮るるさくらかな
抱卵の鳩に見らるる私生活
梅雨茫茫消化器すこし脹れけり
新葉のいつか出るはず蝸蚪の紐
産着はや乾きてをりぬ青筑波
草矢打つ万策にまだのこりあり



空蟬やのぞき窓ある遊女塚
油虫打つ夜叉であり妻であり
向日葵や子に反骨の喉ぼとけ
一徹は父親ゆづり蠅叩
死にたいと幾たびもらす水中花
ナイターのかたち空の抜けぬたり
蓑虫や着こなしといふ技のあり
烏瓜又いとことはこそばゆし
この手放さば溺るる妻よ一の西
ゲレンデに灯の入り人の虫めける
まう吾と寝る子はなし福笑ひ

年間二十句

荒井千瑳子

秋思ふと行き交ふ夜間飛行の灯
四面みな三時に秋の時計塔
新酒酌む山紫水明ありてこそ
冬の灯をともし待つ人あるごとく
蹠に寒さを集めて厨ごと
寒月のそば離れざる星一つ
みな海に出づる安らぎ冬の川
豆腐屋の水音高き寒の明
早春の口の端ふいと革命歌



春の闇押し出すやうに雨戸閉づ
春深むひさし遺愛のハーモニカ
祭あと錠前太き御輿庫
和の色と思ふ風透く立葵
小気味よき啖呵ひとつも祭くる
のうぜんの高み競へり飾り山笠
露座如来椎の青葉を天蓋に
稲びかり赤城は広き裾野見せ
爽籟や紙で編みあぐパンの籠
声にして西鶴を読む良夜かな
給食の白衣ぶかぶか豊の秋

年間二十句

町山公孝

小窓へと紫煙誘はれ冬日差
男二人朝の飯食ふ憂国忌
新海苔を二・四・八と折る朝餉
古希すぎて若手といはれ冬うらら
セーターの赤着て気合入れなほす
日向ぼこして考へのまとまりぬ
天空樹峙つ朝や深雪晴
ぐーに勝つぱーの勢ひ冬木立
上げ潮を連れて海苔舟帰り来る



紅梅のほころび妻のありし頃
結論は方向転換黒ビール
踏み出せる五百一步目柚子の花
サングラスしてもつひ出るお人好し
ひとり居の軒端に灯る梅雨の星
冷房を切りて男の無念無想
アラームをすり抜けて来し流れ星
星飛んでふと口ずさむカンツオーネ
空蟬の大地のいろを宿しをり
星月夜航空尾灯咆哮す
風のまま気ままに生きむ新松子

沖作品



能村研三選

雲の上の南アルプス蛇笏の忌
秋声やフイトンチツドのおもてなし

神奈川

小林 和世

花野への接続を待つ小海線
朝市のかかさの笑顔飛驒の秋

石川

我門 行男

干菜竿連ね間垣に声籠る
鬚剃りの金気の強し雪くるか
時雨るるや息掛け漆の乾き見る
衣擦れの時雨茶会の釜滾る
牡蠣割女眼鏡に泥をつけ通す
この辺が花野の真中にぎり飯
烏瓜ぶらり出かけてみたくなる
けものらの息をひそめて初時雨
満月の喘いで上る大都会
波郷忌の命惜しとて薬喰

東京

関根 揺華

廃鉢の鳥々紡ぎ神渡し
百年を閉ぢし教会ピラカンサ
竜の絵の逆鱗に触れ冬近し

長崎

水木 沙羅

鳥渡る武蔵造りし船台を
秋蝶と連れとなりたる溶岩の道
捨案山子ヘッドライトを睨みたる
鳥渡る石を乗せたる時刻表
逆賊に郷土はやさし草の花
柿すだれ昔話のやうな村

神奈川

菊川 俊朗

熱爛にやかんの記憶達磨の忌
柿紅葉秘仏の腰の括れかな
稲穂波寄り着く島の古墳なり
山の湯に木洩れ日浮かせ秋深し
700系冬の京都に滑り込む
連結の軋みの音や初しぐれ

奈良

前川 京子

沖作品 15句選評

*
陸林 評

干菜竿連ね間垣に声籠る 我門 行男

私も以前能登の輪島の大沢地区で間垣を見たことがある。日本海から吹いて来る北風に雪を飛ばし、海は山に迫る。小さな集落を凍てる冬の強風を柔らかく受け止める竹の城壁のようなものが間垣である。その間垣を利用して干菜竿がかけられていた。晩秋から初冬にかけて、蕪や大根の葉を干して保存食材とするのだ。厳しい冬を乗り切ろうとする北国の人々の生活ぶりが窺える。

満月の喘いで上る 大都会 関根 揺華

中七の「喘いで上る」が面白い。次々と高層ビルが立ち並ぶ大都会では月が上がってくるのは中々見えにくくなった。しかしビルとビルの間から見える満月は幻想的にも見える。静かに、ひっそりと昇ってくる月はまるで喘いでいるようにも思える。夜も更ける頃になると高空に満月が静かに光を放つ。

廢 鉦の 島々 紡ぎ 神 渡し 水木 沙羅

長崎には、高島、伊王島、軍艦島と呼ばれる端島といった炭鉦の島がいくつもあったが、時代の波でいずれも閉山された。私もかつて長崎の崎戸島を訪れたことがあるが、炭鉦が盛んであった時代の島の活気が偲ばれた。神を送る西風に乗って神様自身がその島々の一つ一つを紡いでおられると想像した句である。(以下略)

花野への接続を待つ 小海線 小林 和世

小海線は、山梨県の小淵沢駅から長野県小諸市の小諸駅までを結ぶ鉄道で、日本で一番高い所を走る高原列車である。小林さんはかつてこの近くに住んだこともあるそうだが、山好きの人であれば魅力のある楽しい路線で、八ヶ岳東麓の野辺山高原から千曲川の上流に沿って佐久盆地までを走る。長野県の俳人相馬遷子に、「甲斐信濃つらなる天の花野にて」という句があるが、小海線の沿線には野辺山・清里などの景勝地の間に花野が多く点在する。ローカル線なので、列車の接続や乗り継ぎには多少時間がかかることがあるが、花野へ行く期待感が膨らまば厭うものはない。